

# 集団的自衛権についての さいとう健の考え

本件については、多くの方から御批判をいただいておりますので、こゝは逃げずに、感情的な言葉や、内容と異なるレッテル貼りを排除しながら、静かにさいとう健の考えを述べてみたいと思います。

## <議論の前にしなければならない1つの決断>

まず、この議論を行うには、好むと好まざるとにかかわらず、我々は1つの決断をしなければならないということです。つまり、日本の安全保障をどう確保するかについて、次の3つの中からどうしても1つ選ばねばならないということです。

1つ目は、日本の安全保障はアメリカとの協力の下で確保していくという考え方。2つ目は、日本の安全保障は自国だけで確保していく、3つ目は、自分でも守らない(非武装)。さいとう健は、領土は言うに及ばず自国民の生命や財産も他国に守ってもらうという事態は、誇りある独立国としてはいずれ解消していかねばならないと強く思っていますが、現時点においてそれは現実的ではありません。今は、賢くアメリカとやっていくしかないと思いますが、皆さんはどう判断されますか？

そして、少なくとも、これら3つのうちどれをとるべきかということを行わずに行われる批判は、批判のための批判と言われても仕方ない。

## <議論の前にどうしても必要な認識>

それでは、アメリカとうまくやっていくとして、そのとき大事なのは、今の両国の関係は、日本にとって信じられないくらいに虫のいい話になっている、この点をきちんと認識しなければならないということです。つまり、日本が他国から攻撃を受けた場合にはアメリカの若者が体を張って守ってくれるが、アメリカが他国の攻撃にさらされた場合には、仮にそのことによって日本の存立基盤が脅かされる場合であっても日本は知らん顔。これが今の

両国の関係なんです。こういう関係が今後も長く続くでしょうか。かつてのアメリカならともかく、今のアメリカにいつまでもこんな虫のいい話を期待し続けることは難しい。

せめて、アメリカが他国の攻撃を受けた場合であって、それが日本の存立基盤を脅かすようなケース、せめてそのくらいのケースにおいては、日本もアメリカに軍事的協力ができるようにしようじゃないか、それが今回の集団的自衛権の限定的行使容認なんです。ですから、アメリカに対する支援行動とはいえ、日本の存立基盤が脅かされた場合のみにおける行動でありますから、わが国の自衛のための措置ということなんです。

## <戦争法案か？>

さいとう健は、戦争法案に賛成した、もう応援しないというご意見もいただきました。この法律は、本当に戦争法案なんでしょうか？この点については、安倍総理も指摘していますが、この法律がもし日本が戦争をするための法律であるならば、かつての大戦の際に日本によって甚大な被害を受けた東南アジアの国々、あるいはオーストラリアといった国々がこぞで懸念を表明しているはずですが、そうっておりません。いやむしろ、地域の安定のために必要であるという判断をしています。もしこの法律が戦争法案であるならば、これらの国々がなぜ賛成しているのかの納得できる説明がなければならないと思います。

## <違憲ではないか？>

次は、違憲であるというご指摘に対してであります。一般的な集団的自衛権の行使は、もちろん違憲であります。ただ、今回のケースは、最近の国際情勢の変化に応じて、わが国の存立基盤が根底から脅かされる場合についてのみ限定的に行使できるようにしようとするものです。

## 写真による 支部活動報告



【餅つき】  
年初の餅つきにも飛び入り参加。何カ所も餅をつくってへトへトです。



【お祭り】  
一年かけて作成する個性豊かな飾り。毎年楽しみです。



【ダンスパーティー】  
毎年恒例の会に参加。地元の方々と楽しいひと時を過ごします。



【学校新設】  
人口増加が著しい地域での教育基盤整備が急がれます。



【お祭り】  
お祭りの伝統を守り継ぐ皆さんと一緒に。変わらぬ音色をいつまでも♪



【学生交流】  
選挙権年齢の引下げについて、地元の大学生と率直な意見交換。



【お祭り】  
戦後70年の節目の年、鈴木貫太郎元総理の墓前にて平和を誓います。



【お祭り】  
お祭りの伝統を守り継ぐ皆さんと一緒に。変わらぬ音色をいつまでも♪



【学生交流】  
選挙権年齢の引下げについて、地元の大学生と率直な意見交換。



【お祭り】  
戦後70年の節目の年、鈴木貫太郎元総理の墓前にて平和を誓います。



【運動会】  
子ども達の全力プレーに一喜一憂。見ている私も元気をいただきます！



【納涼祭】  
今年も百万所を超える納涼祭に参加。特養ホームに顔出しする機会も増えました。



【消防訓練】  
出初式・操法大会 水防訓練・地域行事など、団員に見守られていることに感謝します。



【オープニングガーデン】  
最近は見せ方を工夫したお宅も。毎年楽しませてもらっています。



【新興新調】  
新しくなった大人神輿を皆さんと一緒に担がせてもらいました。



【防災訓練】  
防災は地域との協力が不可欠。日頃の備えが減災への第一歩。



【かぼちゃ】  
ジャンボかぼちゃを体感。世界一になる日もそう遠くないのでは？！



【自衛隊】  
注目を集めた一年でした。より一層規律を正した活動に期待します。



【陳情】  
地元自治体の要望を国へ働きかけ。粘り強い交渉が必要です。

もし、このようなケースにおいてさえも違憲であるとするなら、わが国憲法は、日本の存立基盤が脅かされるようなケースにおいても、何もせずそのまま存立基盤を脅かされていなきやいと言っていることとなります。これは、どの国も持つ自衛という自然権を放棄するというものであり、国連でも認められている権利すら放棄するというものであります。憲法学者の意見は意見として、さいとう健は、わが国憲法が日本の存立基盤が脅かされる場合においてもアクションを起こしてはいけないと言っているとは到底思えません。この点は、堂々と憲法学者と議論できると思っております。最終的には最高裁がきちんと判断してくれると確信しております。

## <徴兵制になる？>

徴兵制になるという指摘もいただきました。若者を戦争に行かせずにさいとう健が自分で戦争に行けというご意見もいただきました。戦争をするような自衛隊に若者は入らないから、いずれ徴兵制になると煽る政党もあります。ならば、そういう政党は、徴兵制禁止法案を出すべきではないでしょうか。わが党は、徴兵制は憲法違反であり、ありえないという見解でありますので、わが党からそういう法案を出すことはありませんが、野党からそういう法案が出るのであれば反対する理由もありません。ですが、そういう提案は、今のところありません。本当に心配なら当然徴兵制禁止法案を国会に提出してくるはずなのですが、出てこないということは、本音では徴兵制になることはないと考えている証明になるのではないのでしょうか。

## <アメリカの戦争に巻き込まれる？>

ここで、もしアメリカが攻撃を受けアメリカの若者が苦境に陥り、しかも同時に日本の存立基盤が脅かされるような事態が発生したとして、そのとき、日本が知らん顔をしたとします。その場合アメリカには、日本のためにも戦っているんだという意識が当然あるでしょう。そんなとき、日本が知らん顔を続けたら、次に日本に何かあった時に、果たしてアメリカは自国の若者の命を犠牲にしてまで日本を守ろうとしますでしょうか？私は、極めて危ういと思います。

今回の集団的自衛権の限定的行使を認めると、アメリカの戦争に巻き込まれるという主張があります。確かに、リスクは否定できません。ただ、同時に、この限定的な行使すべし

ではないと主張される方は、そんなことでは、いざというときにアメリカが日本を本気で守らなくなるというリスクが高まるという点も、同時に主張しなくてはならないと思います。アメリカの若者にも、お父さん、お母さんはいるんですから、なんでそんな日本を守らねばならないのかと、アメリカの世論は必ずなる。ですから、限定的ですら集団的自衛権の行使をすべきではないと主張される方は、同時にアメリカが日本を守らなくなってもいいという覚悟も示さねばならないんだと思います。さらに言えば、覚悟だけでなく、日本の自衛力の増強も主張しなくてはならないのだと思います。

要は、集団的自衛権の限定的行使によってアメリカの戦争に巻き込まれるリスクと、そんな程度のことすら日本がしなかった場合におけるアメリカの反応のリスク、のどっちのリスクを取るのかという選択の問題なんです。皆さんにはいろいろなお考えがあるかと思いますが、さいとう健は、後者のリスクの方がわが国に与える影響は比較にならないほど大きいと判断しており、したがって、今回の法律は、好ましいものではないにしろやむをえない選択だと判断しております。時代は変わりつつあります。今までのような虫のいい話は通用しなくなり、しかも、日本を取り巻く安全保障環境は厳しさを増しているわけですから、日米協力による抑止力はなおさら必要です。

## <終わりに>

今後も政府や国会議員は、引き続き、丁寧なわかりやすい説明を国民の皆さんに徹底して行っていかねばなりません。同時に、この法律に基づき実際に自衛隊が武力を行使する場合には、国会の事前承認が必要とされており、われわれ国会議員も、悔いのない賢明な判断が行えるよう一層の研鑽をつんでいかねばなりません。そして、間違いない事前承認の判断が国会において行われるためには、そもそも海外の情勢分析に間違いがあつてはなりませんから、情報収集体制の強化にも努めていかねばなりません。やむをえない法律とはいえ、国会議員にとっても厳しい責任が加わることになるわけで、さいとう健は今更ながらバッジの重さをずしりと感じております。